

第2回「教学と現代10」(ヨーロッパの宗教事情と天理教の伝道)

報告：永尾教昭 (道友社長・元ヨーロッパ出張所長)

本教のヨーロッパ伝道を振り返る—現状と課題—

ヨーロッパにおける天理教の教勢



天理教はフランスのパリに1970年にパリ出張所(現ヨーロッパ出張所)を開設し、本年(2014年)で44年目を迎える。通常の海外伝道の場合、教会系統の布教所などができた国や地域に本部管轄の伝道庁や出張所が置かれることが多いが、ヨーロッパでは本部出張所の歴史がそのままヨーロッパ伝道の歴史となっているのが特徴である。

現時点でのヨーロッパの教勢としては、教会本部管轄出張所・連絡所は、ヨーロッパ出張所及び英国連絡所の2カ所が置かれており、文化協会も天理日仏文化協会とケルン文化工房の2カ所がある。また、教会は1カ所、布教所(出張所)は17カ所、ようぼくは469名である。毎年、ヨーロッパのつどい(ようぼくのつどい)とヨーロッパセミナーを開催し、ようぼく信者の丹精につとめている。

宗教のタイプと信仰を深めるプロセスの整備

宗教には2つのタイプがある。1つは宗教教団という形で世界に伸びている宗教で、カトリックが代表的である。これに対して、宗教教団を必ずしも形成しない宗教があり、仏教やイスラム教がそうである。天理教の場合、おぢばがあつて教会本部を有しているのだから、宗教としてはカトリック型であり、これ以外にはありえない。その意味でも、カトリックの世界伝道のあり方や方法は参考になる。

今後のヨーロッパ布教のためには、イニシエーション(入信儀礼)の構築など信仰を深めるプロセスの整備等を行っていくべきである。天理教では、おぢばがえりが重要な信仰活動になり、ようぼくの資格を得るためにこれが不可欠であるが、外国人の一般信者を想定したときに、おぢばに帰るのは一生のうち1回かせいぜい数回であることを考えなければならない。

そうした場合、ようぼくにはなっていないけれども、信者として自他ともに認識できるものが必要であり、ヨーロッパ布教推進会議ではバッジを提案したこともある。将来的には、ヨーロッパ人の信仰的成人が進み、ヨーロッパ人がヨーロッパ人に布教伝道していくような形に持っていくことが、いつそう求められるだろう。

ヨーロッパ出張所の充実のために

そのためには、“主”はヨーロッパ人であり、“客”も信仰を求めて参拝に来た人であるというのが、ヨーロッパ出張所を充実させる上での基本姿勢になる。神殿講話を従来の日本語からフランス語に切り替えたところ、内容における目の向け方が変わってきた。ヨーロッパへの現地適応を進める際の方策とし

て、次の5点が考えられる。

- (1)日本人村の破壊：朝礼や予定、電話の対応もフランス語を使い、ヨーロッパ人のスタッフを増やして、可能なかぎり現地化を進めていく。
- (2)聖(公)と俗(私)の峻別：聖なる空間(神殿)に私的なものを持ちこまないのがヨーロッパの流儀であり、本教もそれに合わせていく。
- (3)信仰の形の違いの強調：天理教では、人間に聖俗(出家と在家)の違いがないことを説明して、ヨーロッパ人にアピールしていく。
- (4)やや回り道をして教えを説くこと：例えば、お供えという概念が分かりにくいので、キリスト教の教会でいう献金になぞらえ説明することも必要である。
- (5)「みかぐらうた」の各国語への翻訳の検討：原典の言葉は日本語ではなく、“おやさま語”だから翻訳してはいけないというならば、「おふできき」も翻訳できない。将来的には、各国語で歌って踊れる「みかぐらうた」に翻訳すべきを検討していかねばならない。

そのほか、文化活動の充実による社会貢献活動も必要である。これは、天理日仏文化協会がすでに様々な活動を行っているが、おぢばにある教育機関、図書館、参考館、また病院や福祉施設が実はこのモデルになりうるだろう。

「文化活動では信者ができない」というのは、布教伝道においては短絡的な考え方である。とくにヨーロッパのように高度で成熟した文化世界では、信仰だけではなかなか受け入れがたい部分があるのも現実だ。経費の問題もあろうが、文化を育成し、学校を作つて教育をおこなつてこそ、布教伝道の成果も上がりやすい。

日本を持ちこまないこと

文化活動の必要性和同時に、忘れてはならないのは、天理教の教えと信仰を伝える際に、意識的・無意識的に身にまもっている日本的な振る舞いやものの見方を強制しないことである。

例えば、日本人にとっては畳の上で正座するというのでよいが、ヨーロッパでは靴をはいたまま椅子に座る文化である。この意味で、昭和30年代という時期に、おぢばの別席場が靴をはいて椅子に座るという形式にしたのは、二代真柱は欧米の人々がやがておぢばに参拝に来て別席を受けにくることを予想していたのではないだろうか。

同じことは、挨拶の仕方(お辞儀と握手の違い)、ハッピーを着用することなどが挙げられる。変えるべき点があれば、そのつど現地の文化や慣習に合わせて変えていくことが大切である。出張所では婦人会と青年会を結びつけた「パレット」という組織を作つたが、これは男女をあえて分けないヨーロッパ人のメンタリティにうまく訴えることができた。今では40名がパレットに参加し、その大半が未信者の人々である。

各自が多様な建設的意見を出し合い、課題をひとつひとつクリアしていくことで、ヨーロッパでの布教伝道は進んでいく。一般論的な決意表明ではなく、具体的・実践的な布教伝道の戦術や戦略が求められるのである。(文責・金子 昭)